
東方改変録

幸太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方改変録

【Nコード】

N7578X

【作者名】

幸太

【あらすじ】

目が覚めたら何故か見知らぬ草原に居て――。

最弱ステータス主人公が正義だけで困難を乗り越え案外ハーレムになつたりする二次創作。

ゆっくりしていいね。

東方改変伝（前書き）

これは東方プロジェクトの二次創作です。

東方改変伝

「……………何処だ此処はよお」

気付けば俺は草原に立っていた。寝て覚めたら草原に居たのだ。全く不思議。

まるで夢みたいだ。

逆に言えば夢ではないようだ。肌で感じる風から足で踏みつけている草の感触から匂いまで、ありとあらゆるものを感じとれる。夢かどうか確かめる必要もない程にこの草原は現実味に溢れていた。

「はあ」

溜め息が出る。出ない方がおかしいというものだ。何せ結論として俺は訳のわからない場所に来てしまっているのだから。さて電車で帰らねば。しかし幸いなことにこの草原は見晴らしの良い丘になっていて民家が何処にあるかなどはすぐにわかった。しばし歩けば着くだろう。

「さて、ちよいと行きますか」

「何処に行く気？」

独り言に返事が来るなど中々珍しい。声の主の方へと顔を向けるとそこには巫女が居た。

巫女が居たのだ。俺よりも二つか三つ歳が低そうだ。それよりも何故か大きく肩を出したエロい巫女装束の巫女だった。

「いやあ、道に迷っちゃって。東京まではどう行けば良いかな？」

「アンタ、何言ってるの？」

何言ってるんだこいつと言わんばかりの顔で睨まれた。まあ良い質問を変えよう。

「此処は何処？」

「幻想郷。まあ博麗神社の近くの草っ原と言ったら正しいのかしら？」

げんそうきょう？博麗神社？取り敢えず無名な神社の近くらしい。

「何県？」

「けん？何それ。それよりアンタの質問にも答えたのだから私の質問にも答えなさい」

随分と冷たい巫女だ。それよりも県を知らないのか？最近の子は県も知らないのか？いや、この娘も俺と歳はそう変わらないだろうけど。

「アンタよね？結界を勝手に通り抜けたのは。ああ、惚けたって無駄よ。アンタの霊力と結界を抜けた輩の霊力は一致してるわ」

結界？

「すまん、何言ってるんだかさっぱりだ」

「まだ惚ける気？」

巫女は額に青筋を浮かべて俺を睨む。一体俺が何をしたと言っただ。「霊夢、その人は『外』から来てる。何も事情を知らずに幻想郷ま

で来てゐるわ」

突如巫女の後ろから声がした。いや詳しくは巫女の後ろから『スキマ』が現れた。そしてそのスキマから人が出てきたのだ。うわっ、超常現象。スキマから現れた人は外人の様な長い金髪とやたら高級そうなドレスを来た女性だった。スキマから手慣れた様子で降りると手に持っていた日傘を広げた。仕草の一つ一つが綺麗だった。

「紫、急に出ないでよびつくりするじゃない」

「あら、結構な付き合いになるから慣れているかと思つたわ」

「そんな得体の知れないものに慣れるわけないじゃない。それよりこれが外から来たって本当？」

俺を指さす巫女。

「ええ。本当よ。彼は外から来てる」

俺に手に向けるスキマ。

「あのー。俺はどういう状況に置かれてるんでございましょうか」

スキマの人はコホンと咳払いをすると俺に顔を向けた。随分整った綺麗な顔をしてらっしゃる。

「初めまして、私は八雲紫よ」

「どうも伊井一^{い い ひと ひと}です」

「取り敢えず貴方が陥っている状況を説明するわ。結論としては貴方は異世界に居ます」

嘘だろ。

「……………言葉が出ませんね」

「出てるじゃない」

五月蠅いぞ巫女。

「此処は幻想郷。妖怪と人間が共存している世界。でもって私^{わたし}八雲紫は管理人いや、スキマ妖怪だから管理妖怪かしら」

八雲さん妖怪だったの！？というかスキマ妖怪ってなんだよ。あのスキマから出てくるからスキマ妖怪？

「夢を見てる気分ですよ。些か信じられないですね。信じざるを得ないのでしょうが」

ふふ、と笑う。スキマ妖怪八雲紫さん。

「事実は小説よりも奇なりってか」

全くもって事実だ。

「帰りたいのなら結界が治ってから帰りなさい。治ってからでないと何があるかわからないから」

案外簡単に帰れるようだ。

「それじゃあ治った時はお願いします。後どれくらいで治りそうですかね？」

「一年あれば確実ね」

そんなにか。その間に俺はどんな扱いになってるやら。搜索願いを出されていてもおかしくはないだろう。

「貴方行く宛はないのでしょうか?」

「まあ、はい」

「ならこの娘の家にでも泊まっていきなさい。流石に妖怪の家には泊まりたくはないでしょう?」

紫さんさっきまで空気と化していた巫女を指さす。紫さんの家でも一向に構わないのだが、一応見知らぬ土地であるならば同じ人を頼りたい。

「霊夢、勿論平気でしょう?」

「平気だけど勝手にアンタが決めないでよね」

「巫女さん、よろしく」

「博麗霊夢よ。さっき説明した博麗神社の巫女をやっているわ」

「伊井^{ひといち}。よろしく頼む」

「それじゃあ霊夢よろしくね」

と紫さんは俺と霊夢を残してスキマへと潜っていった。本当にスキマ妖怪なんだと今頃感心する。

「あの腹黒女あ」

巫女さんは随分機嫌が悪いご様子。

「まあ良いわ。着いてきなさい」

そして俺は機嫌の悪い巫女、博麗霊夢の後へと続いた。

「フフフ、面白い子が来たわね。フフ」

スキマ妖怪は不気味に笑う。幻想郷などというふざけた空間を作りあげた妖怪の頂点に立つ妖怪は笑う。

「紫様、随分機嫌がよろしいですね」

式である九尾の狐は主の機嫌を伺う。何せ気味が悪い程に良いのだから。

「私の作った結界をたった一人で無意識の内に突破した人間が居るわ」

「なんですって？」

九尾の狐は心底驚いた。それは自分の主が結界制作のプロフェッショナル故の驚愕。恐らく主である八雲紫に結界に関して上回る者などいないだろう。ましてやその八雲紫が時間を掛けて作った最高傑作である幻想郷の結界をたった一人の人間が、しかも無意識の内に破ったのである。

「その人間が今、博麗神社に居るわ。藍、見に行く？」

「その内には、今はそれよりも結界の修復でしょう？紫様」

「ええ。そうね」――

ずずず。と茶を啜る音が部屋に響く。部屋と言っても神社なのだが。

「まったりするのは良いわねえ」

お前は婆か。

「ああ」

ずずず。

まったりしすぎて怖い。

ばりばり、ばりばり。

「この煎餅美味いな。」

「当たり前よ。歴代の博麗の巫女の中で一番働かない私は歴代の中で一番茶と菓子のセンスは良いわ」

自信に充ち溢れた顔で言うことではなかるう。恥ずかしくはないの
だろうか？

「自分で言っでてどう思っ？」

「屈辱よ」

「なら言っなや」

ずずず。

「なんだこのまったりとした空気はああああ！！」

この空気を打ち破ったのは俺でも霊夢でもなかった。

「あら魔理沙来てたの」

突如現れたのは黒い帽子に黒いエプロンに黒いスカート、金髪に幼
さを残した可愛げな顔が特徴の女の子だった。

「霊夢、この人は誰だ？」

「こいつはー」

「伊井一。初めまして」

「おう！私は霧雨魔理沙。魔法使いだ！」

魔法使いだと。

「凄え！本物？格好良いな！！」

「へへ、そんなに誉められると照れるぜ。というかーは魔法使い知らねえの？」

こいつは外から来てるのよと霊夢。

「うわっ。ーも凄いじゃないか！」

「そんなに誉めるなよお」

「五月蠅いわねえ」

霊夢ひどい。

「それよりも魔理沙、あんた何しに来たのよ？」

「いやあ、パチエの所へ行こうと思ってたんだけど暇だし霊夢でも誘おうかなあって」

ふうん、と霊夢。

「まあ良いわ。丁度咲夜に紅茶を貰おうかと思ってたところだし着いて行くわ」

「何処行くんだ霊夢？」

「紅魔館。吸血鬼の屋敷よ」

巫女に妖怪に魔法使いに吸血鬼。吸血鬼は妖怪か。まあ、とにかくなんでもありだな幻想郷。

「ついて来る？」

「血とか吸われないか？」

「平気よ。それに関しては保証するわ」

もはや城。それが初めて紅魔館へ訪れた俺の感想だった。館や屋敷で片付けるのが勿体ないくらいに紅魔館はデカかった。というか幻想郷は博麗神社のような日本家屋から紅魔館のような洋式な館までなんでもアリのようだ。

「さっさと入りましょう」

俺が感傷に浸っていると霊夢が俺の袖を引っ張り門まで案内してくれた。

「受付とか平気なのか？こんなデカイ館なのに」

平気よと霊夢が指さした方向には門番が居た。

ただし昼寝中のご様子。

「こんな警備で良いのかよ？」

「大丈夫。此処の物は魔理沙くらいしか盗らないわ」

「おいおい。酷いぜ霊夢」

「事実じゃない」

「ありや借りてるだけだぜ」

「無断で借りたら窃盗と変わらないわよ」

「うー」

可愛く膨れる魔理沙。ただしこの件はお前が悪い。

門をくぐり屋敷に入る。屋敷の中はやたと暗い。

「暗いなあ」

「当たり前でしょ吸血鬼の屋敷なんだから」

うむ。そう考えると雰囲気出る。というか怖い。

「すまんトイレ行きたいん何処かわかるか？」

「そこよ」

まるで自分の家かのように廊下の辺りを指さす霊夢。

「アンタが迷うといけないから私たちは此処で待ってるわ。早く済ませて頂戴」

「わかった」

小走りでトイレへ向かう。本当に霊夢が指さした方向にトイレはあった。随分来てるんだろっな。

「ふう、すっきりした」

「この紅魔館に何のようですか？」

トイレから出ると突如現れたメイドに声をかけられた。髪は綺麗な銀色で不思議な雰囲気醸し出していた。

「用という用はないけど強いて言うなら吸血鬼に会いに来た」

「ほお、主、お嬢様に会いに来たと。一人で紅魔館に来るとは中々の肝の座りようですね。まずは美鈴を突破と、霊夢との件くだんを思い出すわ。それでは掃除でもしましょうか」

殺気。この人、俺のことを

殺そうとしている。

背筋が凍って動かない。息苦しい。

そんな間にもメイドさんは何処から取り出したかはわからないがナ

イフをそれぞれの指の間に持っていた。

「名乗り忘れましたね。十六夜咲夜。紅魔館のメイド長です。ではお休みなさい」

時間が止まった。

動いているのはこの空間で咲夜さんただ一人。時間が止まっているだけで目に見えてわかる。無数のナイフが俺に向かって投げられていく。

このままじゃ死んでしまう。

そう思った時、横一閃に光が走り、俺に時間が戻った。

「危なかったぜ」

「魔理沙に霊夢？」

咲夜さんがおどけた声をあげる。

「咲夜、そいつは私の連れよ」

咲夜さんは顔を驚愕で一杯にした後、土下座でもするんじゃないかという勢いで頭を下げた。

「申し訳ありませんでした」

「いや、平気ですよ。顔を上げてください。魔理沙が助けてくれました。それよりさっきのなんですか？金縛りみたいな。あれが魔法ですか？」

「あれは私の能力です。『時間を操る程度の能力』」

程度じゃないだろうその能力。

「そうなんですか。魔理沙とか霊夢にもあるの？能力」

「ああ私は『魔法を扱う程度の能力』らしいぜ」

魔法使いらしい能力だ。

「私は『空を飛ぶ程度の能力』」

霊夢って空飛べるんだ。知らなかった。

「なあなあーにはあるのか？能力」

「ないと思うぜ外から来てる訳だし」

「！？外から来たのですか？」

「ああ、はい。そうらしいです」

「珍しいですね。改めまして私は十六夜咲夜です」

不思議な名前だなあ。全員に言えることだが。

「俺は伊井一と言います。よろしく」

「ええ。こちらこそ」

閑話休題。

この館の主人である吸血鬼に会いたいと言ったらあっさりオーケーを貰った。そして今咲夜さんの案内で吸血鬼の部屋の扉の前に居る。因みに魔理沙は用があると言って図書館の方へと向かった。

「レミイ、入るわよ」

霊夢がそう言い扉を開ける。すると中はなんとというか吸血鬼のイメージが頭の中で一瞬にして崩壊した。部屋はファンシーシヨップ同然だった。数多くのぬいぐるみ囲まれた可愛い部屋だった。

「あら霊夢じゃない。その男は誰？」

中からは青い髪をした幼い女の子が出てきた。

「こいつは」

「伊井」

「あら、そう」

「レミリア・スカーレットよ」

小さな吸血鬼は僕に手を差し伸べた。

レミリアの手を取る。その様子を咲夜さんが写真に収めていた。いつの間に。「なあ霊夢、この屋敷の主は？」

「それがレミィなのよ。気付きなさい」

気付くには無理があるだろう。

「まだこんなに小さい女の子がか？」

「失礼ね。少なくとも貴方の50倍程は生きてるわ」

500才は軽く超えていると。信じられん。

「なに驚いた顔してんのよ。妖怪なんてそんなものよ」

霊夢がさぞかしつまらなそうに俺を見る。

「仕方ないだろう。外から来たんだ。幻想郷に来て1日も経ってないんだぞ」

「貴方外から来たの!？」

見た目相応に目を輝かせるレミリア。

「ああ。そうだよ」

「外って此方と何か違う?」

意外にも驚いたのはレミリアだけでなく霊夢やシャッターチャンスを探っていた咲夜さんまでもが携帯電話に興味を示した。

「外の世界の電話だよ。持ち歩くことができる」

「す、凄い!」

レミリアの感激する姿はやはり無邪気で子供らしいものがあった。

「どうやったらこんなに小さくなるのかしら?」

霊夢や咲夜さんは電話の進歩に驚いていた。

俺が何か関わった訳でもないのに何処か誇れるものがあつた。日本の、世界の科学技術に改めて感動した。

「ところで質問。レミリアは人の血を吸うわけ？」

「そりゃ吸うわよ。吸血鬼なんだから」

此処に来てやはり妖怪というものを実感する。

「まあ安心しなさい。致死量まで吸わないわ。それが吸血鬼という生き物よ」

「それでこの紅魔館では」

いつの間にか咲夜さんが背後に回り込んでいた。

「お客様の血を入場料として頂いているの」

続けてレミリアが血も凍るような決め台詞を言い終えた。

そして俺の首筋にかぶりと犬歯を滑りこませ血を吸い上げる。痛みはない。寧ろ美味しそうに唇を動かすレミリアがエロチックで悪い気はしなかった。耳元で咲夜さんが「殺しますよ（ばらしますよ）」などと言わなければ。

「ぷはあ。美味しかったわ」

「うわっ!？」

「いつ見ても慣れないわね。レミィのあれは」

甘美な表情をしているであろうレミリアの顔は確認できなかった。レミリアの顔一面が

赤い。

赤。朱。紅。

真っ赤に、真朱に、真紅に染まっていた。

その姿は本物の吸血鬼。顔を紅に染めて、頬を緩ませるそれは吸血鬼でしかなかった。

「お嬢様、顔に血が付いていますよ」

咲夜さんがポケットから出したハンカチでレミリアの顔を拭く。

「どう？驚いた？」

「ああ驚いた。本当に吸血鬼なんだな」

「信じてなかったのかしら」

「半信半疑と言ったところだったけど、今となっては信じざるを得ない」

「そう」

暗い顔をするレミリア。この館に人が少ない理由がわかった。彼女を鬼と知った人間で此処に近付くのは霊夢や咲夜さんくらいなのだ

ろう。鬼故に人に避けられる。彼女自身もわかっているのだろうが幼さ故に辛いものがあるのだろう。

「大丈夫。また来るよ」

「その時は入場料は頂くわよ」

「血なんかでいいならくれてやるよ」

吸血鬼の友達ができた。ちょっと前まで信じちゃいないものと友達になった。それどころか血を吸われたりとオカルト好きの奴等に聞かせたらなんと言っのだろうか。

「レミリア、この館には他の吸血鬼は居ないのか？」

「居るわ。ただし会わない方が良いわよ。あの娘程吸血鬼らしい吸血鬼なんて私は知らない。鬼と人間は交わるべきではないわ」

その後紅魔館から帰る前にその吸血鬼の話聞いた。名をフランドール・スカーレットと言っらしい。レミリアの実の妹。フランドールは紅魔館の地下に籠っていて外には出ないらしい。理由を上げるなら幽閉されているからだ。

フランドール・スカーレット。彼女は吸血鬼でありながら血の吸い方を知らない。彼女が血を吸えばその人間の血という血が吸い出され命という命が散っていく。彼女は命を壊す悪魔。鬼にすら理解されなかった鬼。鬼の中の鬼。

俺の知っている吸血鬼のイメージそのものだった。

「可哀想だなフランドールって娘」

「そもも言えるけれど鬼にすら理解されない鬼なんて妖怪の次元を越えてるじゃない」

霊夢の言う通りなのかもしれない。ただ姉妹が姉妹らしく笑えない理由など簡単にあってはいけない。何時まで経っても胸のつかいは取れなかった。

「お早う霊夢」

幻想郷で初めての朝を迎えた。これから一年、幻想郷での生活が始まるのだろつ。

「お早う。さつさと朝食を済ませて神社の掃除を手伝いなさい」

「悪い。今日は紅魔館に行くから掃除は手伝えない」

俺は昨日からずっとフランドール・スカーレットのことが気になって仕方がなかった。血の吸い方を知らない吸血鬼。鬼にすら理解されない鬼。そんなフランドール・スカーレットが

『可哀想』で仕方がなかった。

「あんた変わってるわよ。異世界に居ることをなんら躊躇なく受け入れるし、吸血鬼に興味を持つし、ましてやフランドールにまで」

「好奇心が強いだけだろ」

ふうん、と流す霊夢。

それにしても何故俺は異世界に来たことを焦らなかったのだろうか。普通なら焦るところか頭がおかしくなっても不思議ではない。一日寝込んで不思議ではない。なのに俺はあっさり認めてしまっていないのだ。寧ろ初めて幻想郷に着いた時に薄々勘づいていた気もしくもないのだ。

恐らく俺は幻想郷に来た理由を知っている。

焼き魚に漬物、味噌汁。そして白米のセットが二組並んだちゃぶ台。
日本の朝食だ。

「旨そうだ。霊夢って意外に料理上手いな」

「失礼ね。料理くらいできるわよ」

ちゃぶ台に霊夢が着く。

「いただきます」

「うん。美味い」

ふうん、と言いながらも照れる霊夢。案外可愛いところがある。普段素っ気ない態度ばかり取っているものだから元々霊夢が中々の美少女であることを忘れてしまっていた。

「何よ。人の顔じつと見て」

「いや、頬っぺたにご飯粒付いてる」

「えっ嘘!？」

慌てて頬っぺたを探る霊夢。

「嘘」

「騙したわね」

霊夢の沸点は中々低い。ちょっとしたことで容易く怒る。まあ溜め込まれるよりは良いのだろうが。

「ごめん、ごめん。そろそろ紅魔館行ってくるわ。ごちそうさま」

「あつ待ちなさい私も行くわ。どうせ暇だし」

「掃除はどうした掃除は」

「良いのよ。どうせ参拝客なんて来ないから」

霊夢は案外いじけていた。

今日の紅魔館はというと、門番が働いていた。背が高く、チャイナドレスに似通った服装が抜群のプロポーションを強調していた。

「あの、紅魔館に入りたいのですが……………」

「むむ、お客様ですか？それとも敵！？」

門番は急に姿勢を変えこちらに拳を突きだす。拳法のような構えを取りこちらを睨み付ける。生憎、俺の支度が遅かった為に顔見知りである霊夢は先に紅魔館に入ってしまった。

「博麗霊夢の知り合いなんですけど通してもらえませんかね？」

「騙されませんよ」

話を通じない。何故俺は初対面の人に敵意を剥き出しにされる。

「かくなる上は……………」

「やる気になったようですね」

必殺を見せてやる。

「あつ！？あんな所に！？」

虚空を指さす。それはもうオーバーアクションに。

「えっ！？」

門番は空を見上げる。その隙に門を走り抜けた。

「門番が馬鹿で良かった」

失礼なことだと思いがあの手のことに騙されるのは大抵馬鹿だ。前
回来た時は昼寝していたし。紅魔館の門番、恐れるに足りん。

「レミリアー！！会いに来たぞ！」

ベランダでお茶を飲んでいるレミリアを発見したので声をかけてみた。

「あらーじゃない！」

「上がっていい！？」

「良いわよ。入場料は貰うけどね」

ニコツと笑顔になるレミリア。そんなに俺の血は美味いか？

「待てええええええ！！侵入者あああ！！！」

物凄い勢いでこちらに駆けってくる門番。追いかけてきやがった。門番の仕事サボるなよ。

「喰らえー！！！」

門番は美しい跳躍を決めるとその長い脚を伸ばし俺の顔面へ向けて放った。飛び蹴りが頬に突き刺さった。

「うぎゃあっ！！」

白か。

俺の意識はここらで途絶えた。

目を覚ますと門番に咲夜さんにレミリア、それに霊夢も居た。

「申し訳ありませんでした」

門番はペコリと俺に向けて頭を下げた。

「お客様とは知らずに失礼な行為をしてしまって」

「気にしないでいいよ門番さん。こっちも弁解せずに入ってたわけだしお相子ってことで」

「ありがとうございます」

深くお辞儀をする門番さん。そんなに畏まらなくてもいいのに。

「俺は伊井一。これからよろしく」

手を差し出すと門番もゆっくりと手を取った。

「紅美鈴です。よろしくお願いしますね」

門番、改め美鈴はニコリと笑った。しかし直ぐ様咲夜さんに首を掴まれ仕事に戻るようになると言われた。どうやらサボる癖があるようだ。

「では一さんまた今度！」

「美鈴、早く戻りなさい」

どこか抜けた感じがある咲夜さんもこう見るとやはりメイド長なんだという実感が沸く。

「一さん今日はどのような用事で？」

「まずは屋敷の主であるレミリアに確認が取りたい」

「何？言ってみなさい」

俺は此処に来るまでに大分覚悟を決めてきた。

「フランドール・スカーレットに会いたい」

場に沈黙が流れる。最初に口を開いたのは幼い成りをしたレミリアだった。

「目的は何？」

「フランドールとレミリアは姉妹なんだろう？なら仲良くするべきだと俺は思っんだ」

「フランドールに会うのは吸血鬼の私でさえ危険なの。人間のあんたが行ったら」

命の保証はできない。

「わかってる。半日考えたよ。それでも折角の姉妹なんだ、仲良くするべきだよ」

呆れた顔をするレミリア。

「そんなことのために命を捨てる気？」

「姉妹が仲良く笑えるために尽きる命ならそう悪くないと俺は思う」

「わかったわ。そこまで言うのなら私に着いてきなさい」

東方改変伝（後書き）

小説って難しいそう感じた幸太です。もう少しストーリーを引き延ばして書きたかった。文章力をつけたいです。

あつ、できればで良いんで感想ください。

破壊衝動（前書き）

更新遅いのはこのページ量って……………

こんな駄作でよければゆっくりしていつてください

破壊衝動

レミリアは地下への道へと歩いていった。ただ俺はそれに着いていく。後ろには霊夢や咲夜さんも着いてきている。もしものことに備えて戦闘の出来る二人が着いてきた。美鈴は戦闘になった時の屋敷の守護のため屋敷全体の番をしている。戦闘になれば屋敷が吹き飛びかねない。

吸血鬼とはそういうものなのだ。一度戦になれば山は平地に草原は焦土になる。それが破壊の象徴である鬼の戦闘。

「そろそろよ」

地下をしばらく歩いて見えて来たのは牢屋という喻えが妥当であろう部屋の扉。鎖が何重にも巻かれていて吸血鬼が苦手とする十字架が幾つも掛けられていた。

「咲夜、十字架を外して頂戴」

「わかりました」

十字架を外した途端に嫌な気が身体中を回る。

「ゲホッゲホッ」

「このお札を持っておきなさい。楽になる筈よ」

霊夢に渡されたお札をポケットへと入れる。すると気は感じなくなり体も楽になった。

「何だっ たんだ？」

「妖気よ。妖怪が持つ生命力の源。そもそも人間と妖怪では補食関係にあるから強い妖怪が敵意を見せれば人間の内臓を破壊することくらい容易いわ」

「つまり」

「そう。フランドールは此方に気付いているわ」

「そうかい。じゃあコソコソやる必要も無くなったしコソコソする気も無え俺は正面から行くとするよ」

「あっ、馬鹿っ！！なんの準備もなしに」

「フランドール、入るよ」

ガチャリ。意外にも簡単に、軽々と扉は開いた。

部屋の中は暗かった。明かりは部屋の隅に点けられた蝋燭だけで、
かろうじて中の様子が伺える程度のものだった。部屋の中には千切
られた縫いぐるみ、壊れた椅子。部屋の奥の唯一と言っていいと思
われる大きなピアノ。そして蝋燭に近くで座り込む金髪の少女。

「こんにちは、フランドールちゃん」

「お兄ちゃん、誰？」

「君を上へと連れ戻しに来た」

「ふうん、そんなことよりもさあ」

フランドールは立ち上がった。細い脚で細い体を持ち上げ、畳んで
いたであろう虹色の翼を広げて。そして

「お腹減っちゃったからお兄ちゃん喰べさせて」

高らかに死刑宣告をするのであった。

「くっ」

先に飛び付いたのフランドールではなく霊夢だった。霊夢は俺とフランドールの中間距離に立ちお札を手に戦闘体勢へと入った。

「一、退きなさい。死ぬわよ」

「俺が居ないでどうする!!」

「状況を考えなさい阿呆」

フランドールは心底暇そうに髪を弄りだしもう片方の指で俺たちの人数を数えだした。

「ひい、ふう、みい、4人かあ。お腹一杯食べれそうだね」

刹那。フランドールは霊夢の懐へと潜り込んでいた。

「なっ！？」

次の瞬間には空気が張り裂ける程の轟音だった。ただ単純な細腕から繰り出される拳がこの音を作り出したのだ。気付いた時には霊夢は壁に張り付けにされていた。

「霊夢！！」

「お兄ちゃん余所見はだめなんだあ」

遠距離だというのに近付いてすらないのに肩の辺りが裂けた。

「ぐあああああああ！！痛いああああ！！」

突如襲う痛み。体が裂けんばかりに悲鳴をあげる。何が起きたというんだ。

「今のは妖力弾です。妖気を物理的な力に変えて撃ち出すのです。気をつけてくださいね」

気付けば咲夜さんも前線に居た。

そして後ろに居るもう一人を確認する。そこでは偉大なる吸血鬼が震えていた。レミリアは怯えていたのだ。耳を塞いで涙を流して怯えていた。

「元々私は吸血鬼ハンターだったのですよ。吸血鬼との立ち回りは私が一番知っています。私が彼女を落ち着かせたら貴方が彼女を救ってください」

そう言い咲夜さんはナイフを構えフランドールの元へ走り抜ける。

俺がフランドールを救う。やってやる。やってやろうじゃねえか。
やるって決めたんだ。絶対に救ってやる。

「時間よ……………」

咲夜さんは時間を操る程度の能力を発動させる。あの空間では咲夜さんしか動けない。絶対的な力を持つ吸血鬼でも時間に干渉する咲夜さんを捉えることはできない。人間にも妖にも平等に流れる命の根本にして世界の始まりにしてこの世のありとあらゆるものの絶対服従である時間には吸血鬼ですら逆らえない。

「じゃまあ……！」

そんな時間による攻撃が始まろうとした直後、時間が死んだ。

能力による時間干渉が終わった。完膚なきまでに壊され、殺された。そしてフランドールの破壊の矛先は咲夜さん自身へと向いた。

「なっ!？」

「いただきます」

「させる訳ないでしょうがっ!!」

不可解な動きをしたお札がフランドールの前まで高速で近付き爆発する。常人なら木っ端微塵になるその一撃に対してフランドールは若干顔をひきつらせるだけだった。

「霊夢大丈夫かよ?」

「あんたの方こそ平気なの? 普通の人間でしょ?」

「そっという霊夢だってただの……………」

さっきのお札は霊夢のだ。霊夢が此処まで着いてきたのも戦闘出来るから。それにさっきの拳を受けてひよろつとした顔で戻ってきたのも普通ではない。普通あの拳は必殺なのだ。必ず殺す技。皮膚を貫き内臓を抉り命という命を喰らい尽す必殺。腹筋が凄いでは話がつかないだろう。

「簡単に言つと私は強いだよ。幻想郷で一番くらいにね」

最強じゃないか。

「その貴女。そんなにお腹が空いているのなら私を食べると良いわ。まあ私を倒せたらの話だけどね」

踏み込み。たつたそれだけの行為で5mほどはあつた距離を0まで詰める。

「喰らいなさい!！」

しかしお札は空を切る。

「はぁああっ!！」

フランドールが妖力弾を出す。しかしその数は圧巻だった。まるで弾幕だ。そんな弾幕が高速で飛び交う。

「私のことを忘れてはいませんか？」

舞うは白銀。ナイフを構えた咲夜さんはフランドールの時間を止めナイフを無数に投げる。そしてその無数のナイフ全てが吸い込まれるようにフランドールへと向かっていった。

しかしその全てのナイフが未知の現象で破壊され、フランドールにたどり着く前に銀の砂となって落ちていく。

「何処向いてるのよっ！」

連係。お互いが連続して攻撃しフランドールの隙を作る。対するフランドールは霊夢達の弾幕を壊すだけだった。

破壊、破壊、破壊。

霊夢や咲夜さんがどんな攻撃を放とうともその攻撃は破壊されていくだけ。一向に通らない。寧ろ攻撃をし続ける霊夢達の体力が削られていく。

「なんなのよあの能力!!」

「わかりません。少なくとも私達の攻撃は全く効いてません」

「仕方ないわ。私達の全力でやるしかないそうね」

突如霊夢の周りが蒼白く光りフランドールの足下に陣が浮かび上がる。

「夢想天生！！」

フランドールの陣が雷の如く発光する。そして凄まじい轟音が響く。

「博麗の巫女最強の技よ」

まさに言葉通り最強。夢想天生は相手を束縛しながら力を放ち続ける。素人の俺でもわかるくらいの力がある陣の中で働いている。

「秘技、殺人ドール」

そして咲夜さんが追い討ちを掛ける。両手を不自然に上げナイフを構える。その姿は人形を連想させる。そして咲夜さんの時間が作ら

れる。

目視できない程の速さでナイフを撃ち込む。普段の咲夜さんからは想像の出来ない俊敏な動き。獲物を見つけたような目。投げられていくナイフは銀色に瞬きながら流星のようにフランドールへと向かう。こうして初めて咲夜さんが吸血鬼ハンターだったということを確認出来る。使っているナイフも吸血鬼が苦手とする銀。そして殺人ドールはその名の通り殺すための技。殺すための効率を考えた姿勢。すぐにトップスピードに入るナイフ。的確に急所を狙う技術。銀色の流星は断罪の杭となって鬼の心臓を抉る。

そんな吸血鬼を殺すことに特化した彼女は何故吸血鬼のメイドをしているのだろうか？

そんなことを考えていた。

考えるだけの余裕があった。フランドールは止まると思った。絶対的なまでに止まる自信があった。寧ろ彼女の命の心配すらしていた。しかしそんなことはフランドール・スカーレットにはまるで必要がなく。関係のないことがわかった。

夢想天生で無に返り、殺人ドールで刻まれた筈の彼女は笑っていた。

吸血鬼が冷たく笑っていた。

「う、嘘よ。夢想天生が効かないなんて」

「銀の効かない吸血鬼なんてっ!？」

有り得ないと二人は言おうとしたのだろう。だが現に成し得た吸血鬼が居る時点でそんなの虚言にすぎない。

「あぶない、あぶない、空間を壊さなかったら死んでたわ。それじゃあ、今度こそ」

いただきます、とフランドールは言った。刹那的にフランドールは両手を前に出す。

「禁忌レーヴァテイン」

轟。爆音がした。フランドールの手の中で何かが構成されていく。赤黒い、血を連想させるそれはフランドールの手の中で巨大化する。それが何なのかわかるまでにそう時間は掛からなかった。

「槍？」

赤黒い血色の槍が構成されていく。フランドールはその槍を手に取り

り目標目掛けて振りかぶる。

ああ、あれに当たれば終わるんだな、と容易くわかった。どんなに強かろうと喰らえば終わる。霊夢だろうと咲夜さんであろうと例外なく喰い荒らされて終わる。完膚なきまでに壊されて壊されて壊されて破壊し尽くされ殺される。あれが吸血鬼。本当の吸血鬼。人間如きで歯向かえる相手ではなかった。歯が通らないどころかへし折られる。そんな例外的最強が吸血鬼。その例外的最強の中の別格、フランドールスカーレットともなればこうなる結末は当然だった。むしろ運命だろう。

血色の槍は投げられた。

あれで終わりだ。終焉なんだ。俺はそれでいい。その覚悟もあった。けれど俺の我儘で連れてきた霊夢や咲夜さんはどうなる？俺の勝手で死ぬのか。そんなことがあって良いのか？

「糞つたれがあっ！！」

血色の槍の前に立つ。わかっている、俺では盾にすらならないことくらい。それでもけじめくらいつけたい。それに奇跡だって信じてない訳じゃない。

ひれ伏し、消し飛ぶ筈の腕は血色の槍を押さえていた。それでも、今にでも千切れそうな腕の痛みが毎秒訪れてくる。

「があああああつ！！」

「一つ！？あんた！！」

霊夢は驚く。そう、例え幾ら千切れそうであろうとも俺の腕は血色の槍を押さえている事実には変わりはない。

奇跡は起きた。

原理なんてわからない。種も仕掛けもあるかもしれない。それでも俺の腕は指から肩まで何一つ失うことなく槍を押さえつけている。まだ俺達は終わらない。

「すごいね。だけど無駄なんだあ！！」

フランドールが槍へと力を注ぐ。決して力を注いでいるところを見ただけではないが、なんとなくそんな気がした。理由はどうあれ槍は莫大な力を更に飛躍させ俺の腕を喰い千切ろうとする。

「がああああ！！」

喰い千切られると思った腕が重みから解放される。一瞬、腕が吹き飛ばされたのかと思った。けれど腕は指先から肩まで原型を留めていた。そして辺りを見回すと当たる筈のないであろう天井に槍が突き刺さっていた。

「運命を操る程度の能力」

泣いていた筈のレミリアが誇らしげに言った。恐らく血色の槍はレミリアによって無力化されたのだろう。槍が俺達を貫く運命を変えたのだ。

「ねえ」

レミリアは吸血鬼らしからぬ聖母のような笑みで言う。

「私には話したこともない妹のために戦うことなんてできなかった。だから私は貴方を守るために戦うことにしたわ。だから貴方は私のために、私の妹のために戦って！！」

「わかった。ちょっとフランドールを助けてくるから俺に何かあったら助けてくれ」

「ええ。全力を持って助けてあげるわ」

「それなら安心だ」

足は軽々と動く。フランドールへと全力で駆け出す。向かってくる弾幕は当たらない。霊夢、咲夜さん、レミリアが弾幕を潰してくれている。もう、俺とフランドールの距離は10mもない。

「来るなああああああああああ！！」

叫ぶフランドール。弾ける弾幕。身体中に無数の傷ができる。レミリアの運命操作がなければ今ごろ死んでいただろう。それでも今にも意識は刈り取られそうになる。残った距離は後一步。

「フランドオオオル！！」

そして一步を踏みきった。

「やめてよ！！お兄ちゃん死んじやうよ！！私と一緒に居たら死んじやうよ！！早く離れて！」

やっと本心が聞けた。人を食べると言っていたフランドールは所詮

脅しでしかなかった。

そもそもフランドールの力があれば監禁などされるわけがない。されたとしても容易に脱出できる。

「私の能力はなんでも壊しちゃうの。大好きなものも一瞬で壊しちゃうの。だからお兄ちゃんも壊れちゃうよ」

多分フランドールは一時的には閉じ込められていたのだろう。けれど脱出ができることを知ったフランドールはその上で引きこもったのだろう。大切なものを壊さないように。大切なものを作らないように。

それは会ったことのない姉だったのかもしれないしこれから出会う誰かかもしれない。そして彼女は壊すことを恐れた。

「大丈夫。俺は壊れない。お前のお姉ちゃんも壊れない。お前の大事なものも壊れない。この世界はそう簡単に壊せない。だから君は、フランドールは外に出て笑うべきだ。大事なものを作るべきだ。その強い力で大事なものを守るべきだ。もう何も怖くない」

フランドールは泣いた。嬉しくて泣いた。笑いながら泣いた。それを見て後ろの姉は優しく微笑んでいた。姉妹は笑っていた。

目を開けると見たことのある面子が並んでいた。

「お早う。みなさん」

「二日間寝てたのよ！？ただの人間の分際で何やらかしちゃってるのよあんたは」

いきなり霊夢に怒られたがこれはこれで平和染みていて悪い気はしなかった。そして霊夢の隣に目をやると咲夜さんが微笑んでいた。その手には包帯が巻かれていた。

「手、大丈夫ですか」

「平気ですよ。それより一様の方は？」

「大丈夫です」

ならよかったと相変わらず人を氣遣う完璧なメイドっぷりだった。

そしてその隣に目をやるとじゃれあっている姉妹がいた。

「――この娘を何とかして!!」

「お兄ちゃん!おはよー!」

レミリアに抱きつくフランドール。それを嬉しそうな顔をしながら振り払おうとするレミリア。随分と仲がいいことだ。

このために戦おうとした俺は負傷し二日間寝込むなんていうことになった。正直なところ一番意気込んでいた俺が一番足手まといだった。更にはフランドールを救うことなんて出来ずにフランドールが自らを救っただけだった。結局怪我人になったただだったけれどこの二人の笑顔を見れたのなら安いものだろう。

破壊衝動（後書き）

フランドール編終わりました。

次は永遠亭の一を書きたいと思います

兎とニートと永遠亭（前書き）

執筆スピードが遅すぎるorz

待っててくれた方々に申し訳ないです。次の章の感覚は掴んでいるのでできるだけ早く書きたいと思います。

兎と二トと永遠亭

俺は机の上に山積みされた薬を薬箱へと入れる単純な作業を繰り返す。肉体的には響かない作業ではあるが同じ作業を繰り返すので飽きが来る。精神的には中々辛いものだ。

「何故俺がこんなことをしなきゃならん」

「一さんが無銭の身でありながら治療を受けたからでしょ!!」

隣のうさ耳を生やした女の子、鈴仙の言う通り治療を受けた病院もとい永遠亭で俺が無銭だったことが原因。定食屋なら皿洗いのように、ただ働きをさせられている。それももう三週も経ち大分作業に飽きている。他にも色んなことをさせられるがこの作業が大体の割合を占めている。

「あー、暇だ。鈴仙耳触らせて」

鈴仙は前いた世界の女子高生のブレザーに酷似した服を着ていてなんだか懐かしい。耳を除けば違和感はないのだが耳がない鈴仙なんて鈴仙ではない。というか鈴仙は耳がチャームポイントになっていて可愛い。

「ひゃっ、触らないで!! らめえ」

甘ったるい声を上げる鈴仙。もつといじ、触りたくてなるじゃないか。

「や、やめてください!!」

目に涙を溜めて抗議する鈴仙。今日のところはこれ位にしておいてやろつか。

「まあまあ、期限を悪くするなよ。外の世界の電話見せてやるからよ」

必殺携帯電話。幻想郷は科学技術は皆無と言っていい、その為前の世界にあつた携帯電話などは皆興味をそそられる。

「ホレ」

「携帯電話?」

鈴仙の反応は薄かった。鈴仙ならもつと良い反応をしてくれるかと思っていたのに。物凄く期待を裏切られた。

「反応薄いのな」

「私の所にもありましたから」

「もしかして鈴仙も」

「はい。外ではなくて月からですけど」

ホワッツ？

「て事はおまつ、鈴仙って宇宙人？」

「月の兎です」

「月の兎ってこんなに可愛いのかぁ」

「か、可愛い？／＼／」

顔を真っ赤に染める鈴仙。何があったのだろうか？

「地上の兎もこんなに可愛ければなあ」

轟と襖が割れる。

「地上の兎に失礼ウサ!!」

中から出てきたのは地上の兎の妖怪、因幡てゐ。イタズラばかり仕掛ける困った奴だ。

「やあ、てゐ。その手に持った偽の薬入れは何かな？」

「は、謀ったな!!」

「掛かりよったなイタズラ兎めが!! 鈴仙! 縄をくれ今夜は兎鍋だ!!」

「可愛いつて言ってくれたノノヘヘ」

肝心の見方の兎は呆けていた。

「さらばウサー!!」

「コラ、待て逃げんな!!」

イタズラ好きな兎に逃げられた。次は何をされるやら。

「鈴仙、イタズラされる前に終わらせよう」

「えへへ」

駄目だ聞いてねえ。

不運なことに鈴仙がおかしくなったために作業の時間が掛かって仕方がない。作業に慣れたと言っても何年も続けているらしい鈴仙の作業スピードに及ばないし鈴仙が居なければ中々作業が進まない。

「あら、まだ終わってなかったの？まあ、良いわ休憩しなさい。こんつめるのは良くないわ」

薬剤の部屋に入ってきたのは永遠亭の中での唯一のドクター八意永林。美しくはびた白銀の髪を腰の所まで縛りながら伸ばしている。素なら足にまで到達するのではと思う。俺を使い走りとして利用す

る張本人である。因みにこの方も女性だ。正直幻想郷に来てから男を見ていない。それどころか幻想郷の女性は皆美少女であつたり美女だつたりするから男の俺としては嬉しいことこの上ないのだがなんとなく心狭い。

「師匠、鈴仙がおかしくなつた」

「うどんげが？」

八意永林のことは師匠と呼んでいる。鈴仙が師匠と呼んでいたので便乗して呼んでいる。何より八意さんや、永林さんと呼ぶよりも呼びやすいことからそう呼ぶことにした。因みにこの人は鈴仙のことをうどんげと呼んでいる。鈴仙が永遠亭に来た時に半ば強制的に付けられた名字、優雲華院からきているらしい。本人にうどんげと呼んだところ敢えて無視をされたのを考えるとうどんげと呼ばれるのは嫌らしい。それでも呼び続けるところを見るとどれだけ師匠がサタステイックなお方かとよくわかる。

「うどんげ暇みたいね、新しくお薬を作ってみたのだけれど」

ニタリと師匠は笑う。そして鈴仙は体を震わせるように起こした。

「な、なな何言ってるんですか？バリバリ仕事中ですよ」

異常な速さの作業をする鈴仙。その顔は青くなっていた。

「ふふ、冗談よ。お茶でも飲んで休憩しなさい」

師匠がそう言うのと鈴仙の顔色は戻り強張った体も肩の力を落とし普段通りになった。

「そういえば師匠、今日も組手してもらって平気ですか？」

俺は師匠に武術の稽古を受けている。紅魔館のこともあったし何より幻想郷は人より妖怪の方が多いのだ。師匠曰く鍛えておかないとろくに外出もできないらしい。そもそも師匠は鈴仙と同じように月から来ていて本人が言うには『月の頭脳』と呼ばれブイブイ言わせていたらしい。真相はわからないが。まあとにかく天才にして完璧人間である師匠に武術を教わっている。そんな訳で月で使われている護身術らしいものを一生懸命に練習している。

「ええ、良いわよ。その作業が終わったら竹林に来なさい。相手してあげるわ」

「ありがとうございます」

そんなこんながあつて、今では俺と師匠は晴れて師弟関係である。

「それじゃあ庭で待っているから終わったら声を掛けなさい」

作業を始めようとするのと鈴仙が「私がやっておきますから」と気遣ってくれたので遠慮なく庭に向かった。善意は受けとるべきだ。

閑話休題。

竹林の中にひっそりと佇む永遠亭の庭にて俺は師匠とにらめっこをしている。無論遊びではなく、相手がどうするかを伺っている。少なくとも雛っ子の俺には師匠がどうでるかなどわからないが考えることに意味があると師匠は言う。

「行かせて貰うわね」

一瞬の出来事だった。師匠は身体全体のバネを活かし軽めの跳躍。そして身体を捻り蹴りを放つ。その軽そうに見える動きから想像のつかない重い一撃。腕で押さえるものの易々と吹き跳ばされた。

「はっ！！」

更に掛け声と共に回し蹴り。速さだけを追及した追い討ちの技。足場が崩れそうになるが持ちこたえ、返しの拳を放つ。

「甘いわよ」

しかし反逆も無残に押し殺され、ステップと共に回避されてしまう。

「畜生！」

「ふふ、掛かってきなさい」

「うおおおお！」

走り込み師匠との間合いを詰める。そして右腕を引き拳を放つ。今までの修行で身につけた拳は低級〜中級の妖怪なら確実に気絶へ持ち込める程の威力を手に入れている。しかし華奢な師匠の腕に阻まれダメージというダメージを通していない。

「まだまだっ！！」

次は左の拳を放つ。威力は圧倒的に右に劣るが速さは中々のもので不意打ちに使うには持ってこいの代物だ。ただし師匠に不意打ちが

効く筈もなく寸のところで避けられてしまつ。

「中々上手だったわ」

師匠は俺に蹴りを放ちその衝撃で遠距離へ移動。そのまま地面を蹴り、跳躍する。そして俺の頭上で足を振り上げ勢いよく降り下ろす。

「危なっ！！」

必死に回避した後には俺が居た場所にクレーターが出来ていた。殺す気かよ。

人間技でないように思われる師匠の技は霊力という力を使った技で普通では有り得ない威力であつたり男である俺の一撃を受け止めたりにしている。俺も多少は霊力の行使が出来るのだが師匠程巧みに使うことはできない。

「師匠、殺す気ですか？」

「嫌だ。貴方なら死なないわ。頑丈じゃない。それに貴方の拳も普通の女の子なら死んでるわよ」

師匠は普通の女の子じゃないだろう。と心の中で愚痴ってみる。しかしまあ俺も随分と人間離れたものだ。霊力の行使をすればライフルを越えた破壊力に包丁が通るところかへし折れる程の強度の体になってしまうのだ。

「師匠、次は妖怪の女の子も危ない技を使っんで」

「あら楽しみね」

右手に霊力を集中させる。集中させて圧縮する。右手という小さい体のパーツに到底収まらないであろう霊力を圧縮する。師匠との修行を一週間程繰り返し返してわかったことは霊力の扱いがおよそ天才と呼べるレベルだということだ。妖怪退治の専門、博麗の巫女に匹敵するほど、もしくはそれ以上の技術があると師匠は言っていた。俺と博麗の巫女である霊夢にしかできないであろう霊力の超圧縮。多分これでしか師匠と渡り合うことはできない。

「うおおおおお！」

全力で師匠に突進する。0距離になる寸前で弓のように腕を引き持てる力を持って降り下ろす。

「ただの拳じゃ勝てないわよ」

師匠は腕を交差させ拳を受けようとする。けれど俺の放った拳は止まらない。止まる筈がない。

これは必殺なのだから。

轟音と共に地面が破裂する。真正面で喰らう筈だった師匠は何処かへ消え、代わりに地面を完膚なきまでに砕かせた。

「危なかったわ」

全く危ないといった雰囲気を感じさせない口調の師匠が俺の後ろに居た。

「どうやって避けたんですか？」

「内緒よ」

「ああ、また負けか」

鋭い手刀が首を捉えたのと同時に意識は闇の中に墜ちた。

「また負けたみたいね」

目を開けるとニタニタと笑う少女が目に入る。整った顔立ち、絹のように艶のある黒髪。絶世の美少女と言われて否定できない。それどころか彼女こそが絶世の美少女なんだと確信が持てる。

それもその筈だろう。彼女は数々の俺を虜にした蓬莱山輝夜。すなわちかぐや姫なのだから。名前と経歴を聞いた時は心底驚いた。しかし彼女の美貌の前に否定する理由は何一つなかった。寧ろ当然のようにも思えた。

閑話休題。

月に帰る筈だった輝夜が何故未だに地球にいるかというところから逃げ出し追われている身なのだそう。よって地球の中でも幻想ではない幻想郷に逃げ込んだらしい。その中でも更に場所を知り尽くした者でなければまともに探知することもできない迷いの竹林にひっそりと永遠亭を建てたそう。病院として機能している理由は管理人である八雲紫さんに伝えた表向きの理由らしい。そもそも迷いの竹林の中にある病院など中々来ようとは思わないだろう。

「ああ、また負けたよ。今度こそは勝てると思ったのに」

「勝てなくて当たり前よ。永林は天才なんだから。あんたみたいな偏った天才と違って万能な天才だから勝てなくて当然よ」

「そうかい。けど、どんな万能でも暇は持て余すんだろ？」

「不死とは酷なものね」

蓬萊山輝夜、八意永林、この二人は不死身である。正真正銘の。よってどんなにこの世界に絶望しようとも生き続けなくてはならない。殺されることすら敵わない。

「お前も暇なんだろう？」

「そりゃそうよ。まあ、あんたが来てからは退屈しないで済んでるわ。感謝する」

師匠が俺の修行をしてきているのも退屈しのぎなのかもしれない。それでも自分が人のためになっているというのは中々嬉しいものだ。

「人里にでも出ればどうだ？退屈しないと思うぜ」

「嫌だわ。そんなんで月の連中に捕まってただでさえ退屈なのに牢屋にでも入れられたら不死なのに死んでしまうわよ。まあ、人としては死んでいるんだろうけどね」

嗚呼、こういう輝夜の表情に男達は虜になったのかもしれないな。そう思えた彼女の表情は儚げで触れたら壊れそうな神秘的な美しさを持っていた。

「お前は生きてるじゃないか」

「まあ、その通りね。そろそろ晩御飯の時間ね。食卓に行きましょう」

兎と二トと永遠亭（後書き）

取り敢えずこの章で永林と輝夜についてスポットを当てたかったです

うどんげは萌え要員

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7578x/>

東方改変録

2011年11月8日14時01分発行